

8/31 2008



Japan Music Education Society News Letter

第33号

No.33

日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1. 報告・お知らせ	
1-1 平成 20 年度第 2 回常任理事会報告	2
1-2 編集委員会からのお知らせ	6
1-3 第 4 回夏期ワークショップ報告	6
1-4 第 39 回全国大会（国立音楽大学）のご案内	11
2. 海外トピックス	
2-1 ISME 第 28 回世界大会および Commission セミナー報告	14
2-2 第 39 回韓国音楽教育学会学術大会（夏期学術セミナー）報告	21
3. 新刊紹介	
3-1 Music Education Policy and Implementation: International Perspectives（今田匡彦）	23
3-2 リズム&ゲームにどっぷり！リトミック 77 選 他（神原雅之） ...	24
3-3 図解日本音楽史（田中健次）	25
4. 事務局より	
4-1 お知らせ	26
4-2 前事務局スタッフより	27
編集後記	27

1. 報告・お知らせ

1-1 平成20年度第2回常任理事会報告

日 時：平成20年7月12日（土）14:00-16:30

場 所：キャンパス・イノベーションセンター 506号室

出席者：吉田，北山，齊藤，八木，嶋田，杉江，三村，津田，小川，田中

記 録：田中

【会務報告】

5月11日 平成19年度会計監査

平成20年度第1回40周年記念論文集編集委員会

平成20年度第1回常任理事・理事会

6月30日 音楽教育学 第38巻 第1号 発送

ニュースレター No.32 発送

【審議事項】

1. 理事の補充について

吉田会長より，退会した井口理事（関東地区選出）の補充として，同地区の本多佐保美氏が理事を承認したこと，また業務として会計を担当してもらう旨の提案があり，承認された。

2. 第39回全国大会（国立音楽大学）について

発表件数（個人発表92件，共同企画4件）等の報告のあと，日程案について提案があり，日程について検討・修正のうえ，承認された。

3. 平成20年度補正予算について

原案が提案され，検討・修正のうえ承認された。

4. 平成21年度予算案について

原案が提案され，検討・修正のうえ承認された。なお平成21年度以降は，学会の収入に対して支出が上回る

（単年度赤字決算になる）ことが予想されるため，なんらかの対応が必要であることが確認された。

5. 新入会員及び退会者について

新入会員44名の入会と申出退会者4名の退会が承認された。（別表）なお7月8日現在で正会員1,512名。

6. その他

くらしき作陽大学主催による「音楽療法国際シンポジウム in Kurashiki」に対する後援依頼（名義使用）があり，承認された。

【報告事項】

1. 各委員会報告

1-1 編集委員会

権藤委員長が作成した報告書をもとに八木編集委員より以下の内容が報告された。

1-1-1 学会誌の状況

『音楽教育学』第38巻第1号発行。

『音楽教育実践ジャーナル』vol.6-1
編集者に入稿。

『音楽教育実践ジャーナル』vol.6-2
特集「音楽する身体」原稿依頼終了。

1-1-2 会員からの投稿

『音楽教育学』研究報告2件

『音楽教育実践ジャーナル』実践報告1件
いずれも第2回編集委員会で審議予定。

1-1-3 次回委員会について

第2回編集委員会：8月9日（土）
13:00より 於立教大学

第3回編集委員会：11月7日（金）
於国立音楽大学

1-1-4 その他の報告

『音楽教育学』第38巻第2号は大会
特集号となるが、大会時期が昨年同
様遅いため、例年の奥付通り（12月
25日）の発行が難しい。昨年は1月
20日頃に発行されたが、今年度につ
いてはこれから編集予定を検討する。

1-2 国際交流委員会

藤井委員長が作成した報告書をもと
に田中国際交流委員より以下の内容
が報告された。

1-2-1 韓国音楽教育学会の会長の 交代について

4月19日、会長がクォン・ドクウォン
氏から、ミン・キョンフン氏へと交
代した。

1-2-2 韓国音楽教育学会学術大会 （夏期学術セミナー）

1）夏期学術セミナーは、8月14、
15日に韓国・忠清北道の韓国教員大
学校で開催予定。

2）吉田孝会長の特別招待講演は、8
月15日（金）9:00～9:45を予定。

3）国際交流委員会からは、藤井委
員長、田中委員が参加する予定。

4）7月5日、本学会会員むけの案
内を、学会ホームページに掲載した。

5）参加申込の手続きが煩雑なため、
今回は藤井委員長が窓口となり、日
本からの参加希望者を取りまとめ
る。

1-2-3 今後の交流について

吉田会長より、韓国音楽教育学会と
の交流については、基本的には以前
取り交した内容を基本に、今後も国
際交流委員会が窓口となり、韓国側
と協議する。

1-3 音楽文献目録委員会

山下委員が作成した報告書をもとに
齊藤事務局長から以下の報告があつ
た。

1-3-1 第136回音楽文献目録委員会

日時 2008年6月21日(土)

場所 武蔵野音楽大学

1) 文献選定

選定リスト136に基づき、掲載タイト
ルの選定を行った。

2) 報告事項

① 科研費申請について一対象外で
ある旨の連絡があった。

② 助成金および個人寄付について
一野村学芸財団へ打診することにな
った。

③ 3月に個人寄付依頼の手紙を発送
した結果、12名より寄付を頂戴した
（氏名省略）。

④ IAML（国際音楽資料情報協会）
日本支部について5月21日の総会で、
新支部長と役員が選出された。

⑤ Fontesへの文献送付（IAML日本

支部からの委託作業)の完了。

⑥ 本年度の作業経費は約6万円 (IAMLからの補助金は4万円)であった。

⑦ RILM本部への文献送付についてー今年からWeb文献システムであるiBisへの直接入力を開始した。今回の作業で見出された問題点については、7月のナポリ国際大会で確認予定。

⑧ 印刷会社への支払いー昨年度の未払い代金504,050円を6月に支払った。

2. 第4回夏期ワークショップについて
杉江, 小川, 三村企画担当理事より,
「日本音楽教育学会第4回夏期ワー

クショップ in Tokyo」の資料をもとに、当日の日程, 準備, 理事の担当役割等について報告があった。

3. 第40回全国大会(広島大学)について

三村理事より, 会場校の都合で例年より早く開催する予定との報告があった。

4. その他

・事務局長より交通費の支給方法の明文化がなされた報告があった。

・事務局長より賛助会員の報告があった。

・吉田会長より学会活動検討委員会の設置について人選を検討中であることが報告された。

・今後の予定

8月9日	平成20年度第2回編集委員会 研究発表受理通知
8月18~19日	第4回 夏期ワークショップ 会場: 東京音楽大学
8月下旬	音楽教育実践ジャーナル Vol.6 No.1 発行 ニュースレター 第33号 発行 第39回大会プログラム発送
11月7日	第3回編集委員会 第3回常任理事会, 第2回理事会
11月8~9日	第39回全国大会 会場: 国立音楽大学
1月	音楽教育学 第38巻第2号 発行 ニュースレター 第34号 発行
2月中旬	平成20年度第4回編集委員会 平成20年度第4回常任理事会
3月末日	音楽教育実践ジャーナル Vol.6 No.2 発行 ニュースレター第35号 発行 平成20年度会計決算

・新入会員

会員番号	氏 名	所 属 先
3525	仁科 良美	岡山大学（院生）
3526	福井 善子	梅花女子大学
3527	半田 才子	エリザベト音楽大学（院生）
3528	栄長 敬子	新潟青陵大学
3529	小栗 志乃	上越教育大学（院生）
3530	三浦 あかね	
3531	相原 尚美	広島大学（院生）
3532	矢野 沙織	広島大学（院生）
3533	岡部 玲子	常磐大学
3534	中村 かおり	中村音楽教室
3535	松下 友紀	広島大学（院生）
3536	上川 貴大	東京音楽大学（院生）
3537	大森 由紀	広島大学（院生）
3538	阿部 侑光子	日本大学（院生）
3539	井上 明	広島大学(院生)
3540	中村 香	新潟市立白山小学校/新潟大学（院生）
3541	星山 真希	東京音楽大学（院生）
3542	森本 裕子	東京芸術大学（院生）
3543	金勝 裕子	十文字学園女子大学
3544	工藤 千晶	広島大学（院生）
5345	銭 沁	東京音楽大学（院生）
3546	山上 陽美	（財）武蔵野市福祉公社
3547	中村 公俊	
3548	王 紅	千葉大学（院生）
3549	藤原 一子	名古屋大学（院生）
3550	近藤 裕子	環太平洋大学
3551	齋藤 綾子	新潟大学（院生）
3552	大工原さやか	新潟大学（院生）
3553	塔 娜	広島大学（院生）
3554	四童子 薫	広島大学（院生）
3555	小林 美貴子	広島大学（院生）
3556	乙部 はるひ	日本女子大学（院生）
3557	石川 真裕美	茨城大学教育学部附属小学校
3558	長澤 希	広島大学（院生）
3559	桑田 一也	広島大学附属三原中学校
3560	田村 にしき	東京芸術大学（院生）
3561	小泉 元宏	東京芸術大学（院生）
3562	小川 百合子	横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校
3563	楠本 勝	横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校
3564	菅沼 邦子	広島女学院大学
3565	谷 貴子	福岡教育大学（院生）
3566	橋本 智明	東北大学（院生）
3567	大竹 紀子	相模女子大学
3568	山本 理人	（株）宮地商会

1-2 編集委員会からのお知らせ

○ 『音楽教育実践ジャーナル』の投稿規程には、「本文、注、譜例、図版、図表、写真等を含めて、最長で 20,000 字程度とする」とあります。つまり、譜例や図、写真についても、そのスペースを文字数に換算した分量と考えます。したがって、提出される原稿の 1 ページあたりの設定文字数で 20,000 字をわたった枚数が最長の分量となりますので注意下さい。

○ 『音楽教育実践ジャーナル』の投稿規程には投稿の種類を明記することは書かれておりませんが、論文、実践報告、提言等、種類の希望がある場合はお知らせ下さい。ただし、審議の結果、種類を変更していただく場合もあります。

○ 8月9日(土)に第2回編集委員会を開催しました。詳しくは次号でご報告いたしますが、『音楽教育学』研究報告2件、『音楽教育実践ジャーナル』実践報告1件の投稿原稿のうち、研究報告1件が審議の結果採択となりました。また、『音楽教育学』研究論文3件、『音楽教育実践ジャーナル』実践論文1件について、査読手続きに入りました。

1-3 第4回夏期ワークショップ報告

第4回夏期ワークショップを終えて

企画担当常任理事 杉江淑子



8月18・19日の両日、東京音楽大学を会場として、第4回夏期ワークシ

ョップを開催しました。両日とも 50 名強の参加者が、ワークショップのテーマ「つくって、たたいて、おどって、あわせて」のとおり、心と身体、そして耳をいっぱいに解き放ってさまざまな課題に取り組みました。

1 日目のパフォーマンス・コースは、セネガル出身のサバル奏者、ワガン・ニジャエ・ローズ (Wagane Ndiaye Rose) 氏によるサバルドラムのアンサンブルとダンスです。サバル太鼓を福島コダーイ合唱団から 7 台、宮城

教育大学から3台、ワガンさんから15台、ジャンベを信州大学から20台お借りし、加えて大きな“マイ・ジャンベ”を持参しての参加者もおられ、すべての参加者がひとり1台の太鼓を膝に抱えてセネガルのドラム・パーカッションに挑戦することができました。

参加者はワガンさんの奏するドラムのリズムを耳でキャッチし、手のひらを真っ赤にしながらひたすら模倣し、繰り返します。繰り返しているうちに、自分たちなりに身体でリズムをつかみ、全員のリズムが揃ってくると、次のリズム・パターンにつながります。こうして覚えた一連のリズムを私たちがドラムで奏すると、そこにワガンさんの即興的なリズムが重ねられ、なんともいえない心地よいリズム・アンサンブルが生まれるのです。ユーモラスな振り付けのダンスもワガンさんをひたすら模倣。しかし、なかなかワガンさんの動きのようにはいきません。壁面いっぱいに張られた大きな鏡に自らの姿を映しながら、なんとかワガンさんに近づこうとして踊る参加者の姿がほほえましく感じられました。ドラムと踊りに加えて、セネガルの子どもの歌や子守歌も教わりました。さらにワガンさんの父上、セネガルの人間国宝ドゥドゥ・ニジャエ・ローズ氏の若き日の映像とともに、セネガルの人々の暮らしやサバールの製作工程などが描かれたDVDを視聴させていただき、セネガルの音楽の文化的背景の一端を知ることができました。もう一度ワガンさんにお目にかかりたい！という名残おしとともに1日目のワークショップを終え

ました。

2日目の授業づくりコースは、牧野淳子氏による「音楽ゲームから音楽づくりへ—with BAMBOO—」です。生まれも育ちも京都の牧野さんならではの、京都イントネーションによる「なべなべそこぬけ」を歌いながらの音楽ゲームを通して、緊張気味だった参加者の表情が次第にほころんできます。午前中は、ボディサウンド、トーンチャイム、ボールなどを縦横に使った音楽ゲームです。バスケットボールとバレーボールとドッジボールを10個ずつ用意していただきたいのですが・・・と依頼を受けたときは、「？」マークでしたが、「なるほどね！」と納得。身体とリズムが音楽的に一体化しないと、ボールは隣の人にうまく渡らないのです。

昼食タイムまで一気に音楽ゲームで駆け抜けた後、午後はいよいよ竹楽器の登場。牧野さんがご自宅から50本ものトガトンとトガトンを打ち付けるレンガや石(!)まで会場に送ってくださり、全員が一人1本のトガトンを持ての1拍ずらしのアンサンブルに挑戦できました。私たちにとって、フレーズごとのずらしは容易でも、1拍ごとのずらしは意外に難しいものです。そのことを牧野さんはよく知っておられて、1拍ずらしのアンサンブルに到るまでに幾つもの考えつくされたステップが用意されていました。

振り返って、このワークショップで感じたのは、牧野さんの「引き出し」の多さ、何でも音楽づくりにつないでみようとする探究心、そして参加者に寄り添

った「参加者目線」です。いくらアイデアがすばらしくても参加者の気持ちとの乖離があると、音楽づくりはうまくいかないでしょう。このワークショップでは、「あっ、面白そう！できそう！」というところから始まって、いつの間にかステップアップし、最後には「おおっ！」という音楽ができ上がるという体験の連続だったのではないのでしょうか。これ

は、音楽教育に携わる者として大切なことであると感じました。プログラム終盤に、全員でバンブーオーケストラを演奏した頃には、参加者全員が以前からの知り合いのようにつながった、そんな心地のするワークショップでした。

最後に、暑い中をこのワークショップにご参加くださった皆様に心より感謝申し上げます。



パフォーマンス・コース（ワガン・ニジャエ・ローズ氏）



授業づくりコース（牧野淳子氏）

異文化リズムの魅力

大阪教育大学大学院 竹下裕来

今回初めてワークショップに参加させていただきましたが、セネガルのサバールドラムを体験して、異文化の音楽への底知れない魅力を感じることができました。ドラムの演奏だけでなくダンスや歌などの楽しい時間を過ごし、その中でもワガンさんからセネガルの文化・生活について直接話を聞いたことは大変貴重なことでした。お話で特に印象に残ったのは、セネガルを含めアフリカの子どもは小さい頃から太鼓で遊んでいる、という話です。

私は今も大学院で音楽を勉強していますが、リズム感の習得について困難さを感じます。これは、小さい頃にそういった体験をしてこなかったからかもしれません。そこで最近特にアフリカ由来の音楽を意識的に聴いて、その音楽とリズムは体に大分しみ込んできたものだと思っていました。しかし、今回のワークショップで本物のリズムを直に感じると、その感覚の違いに愕然としてしまいました。ワガンさんのお話からも考えられるように、生まれ育った環境の違いから根本的にリズム感覚が違うのでしょう。このような驚

きとショックは発見であり、とても意味のあることだと思いました。

世界の諸民族の音楽を授業で扱うことの意義のひとつは、それぞれの国の音楽の違いを理解し受け入れていくことだと思います。そして子どもが教師に言われて違いを理解するのではなく、自ら違いに気づいてほしいと考えます。今回サバールドラムを体験して、私も違いに気づき全身で強く感じることができました。その違いは違和感とは異なり、とても魅力的なものです。この体験から、サバールドラム以外にも魅力的な音楽が世界中にたくさんあるのだろう、という興味が尽きることなく湧いてきます。これから常に、様々な音楽を意欲的に聴こうとする姿勢を忘れてはならない、と強く感じました。



音楽づくりは進化する！

～人と出会い感動する「ライブ感」いっしょにやりたいと思える「アンサンブル感覚」～

山梨県・忍野村立忍野小学校 小林 恵

また、牧野さんに会いたい！その思いで今回のワークショップを受けた。

6年前、私は学部4年のときに牧野さんの研究会を訪ねたことがある。そのとき感じたのは「音楽づくりってライブみたい。一体感がある！」ということ。「楽しい」を共有できる「ライブ感」が「音楽ゲーム」にはあると直感的に感じたのだ。「音楽づくり」が歌唱したり演奏したり音楽を聴いたりすることと同じくらいエキサイトできるものであることに気づいた瞬間だった。これを伝えていきたい一心で私は小学校の現場に出ることを選んだ。

誰もがエキサイトできる音楽ゲームであることは6年経った今も変わらない。むしろ進化している。牧野さんのエンカウンターによって、私たちが解きほぐされていく。子どもにかえっていく。はじめての人ともコミュニケーションがどんどんとれる。そして「音楽ゲーム」がいつのまにか「音楽」になっていくのだ。簡単なルールによって人と人の音によるコミュニケーションができる。それがつながると音楽になり、終止をつくと音楽が完結する。まさに「アンサンブル」。「いっしょにつくると楽しい」という「アンサンブ

ル感覚」をつかむことができるのが音楽ゲームなのだ。

どうやったら「音楽的」になるか。それは「音を音楽へ構成していく『☆』」だそうだ。「キラリとその音楽が光る何か『しかけ』なのか『かぎ』なのか、『☆』の中身は皆さんで考えて。」と宿題をいただいた。まさに自分たちでつくっていく「音楽ゲームから音楽づくりへ」のきっかけをみせてくださった牧野さんらしい言葉。これだからまた受けたくなる。

音楽づくりの魅力をライブで感じた教育現場の私たちが日々の授業のなかで行事や現場のニーズに答えることもやりながら、3分でも5分でも取り入れること、「音楽づくりって楽しい！魅力的！」と思えるような活動を展開していきたい。



1-4 第 39 回全国大会（国立音楽大学）のご案内

実行委員長 藤沢章彦

大会についての詳細が決まりましたので、お知らせします。今回は、研究発表の申し込みが大変多く、実行委員会でもうれしい悲鳴でした。そのため、常任理事会とも相談の結果、当初の予定を若干変更いたしました。ご確認の上、多数の皆様のご参加をお待ちしています。

【第 1 日】 11 月 8 日（土）

8:45		9:30	12:30		13:30	15:00		15:15	16:45		17:00	17:45		18:00	19:30	
受付	研究発表 A (2-11) B (2-12) C (2-14) D (2-16) E (2-21) F (2-23) G (2-25) *Cは13:00 まで	昼 食	共同企画 I (1-225) 共同企画 II (5-122)	移動・休憩	共同企画 III (1-225) 共同企画 IV (1-209) *IVは16:15まで	移動・休憩	総会 (5-113)	移動・休憩	懇親会 (5号館 食堂)							
	プロジェクト研究 I (1-321)		プロジェクト研究 II (1-321)													
	ワークショップ I (3-107 合唱スタジオ)		ワークショップ II (5-122) ワークショップ III (1-507, 1-B26)													

【第 2 日】 11 月 9 日（日）

8:30	9:00	12:30	13:30	14:30	14:40	16:00
受付	研究発表 H (2-11) I (2-12) J (2-14) K (2-16) L (2-21) M (2-23) N (2-25)	昼食	講演 I (講堂小ホール)	移動・休憩	講演 II (講堂小ホール)	
		院生フォーラム (2-26, 2-27)				

* () 内は会場です。

[例] (2-11) 2号館の1階 11 教室, (1-225) 1 館の2階 225 教室

* 2 日目の開始時刻は 9:00 ですので、ご注意ください。

* 研究発表の打ち合わせは、初日は 9:00 から、2 日目は 8:30 から各会場にて行います。口頭発表者、司会者は時間にお集まりください。

- 1 会 場：国立音楽大学（交通＝東京駅－JR 中央線立川駅－（モノレール）－玉川上水駅。または、山手線高田馬場－（西武新宿線）－玉川上水駅。玉川上水駅から徒歩 7 分）
*東京駅からだと約 1 時間半。高田馬場からだと約 1 時間です。
- 2 参加費：会員 4,000 円（事前振込払い）、4,500 円（当日払い）
非会員（臨時会員） 2,500 円（1 日のみ）、4,500 円（2 日間）
*出欠回答はがきは、ご欠席の場合もお出しください。総会に出席できない方は委任状に記入して必ずお出しください。
- 3 懇親会費：4,000 円 できるだけ事前に申し込みと費用の振込をお願いします。
- 4 ホテル宿泊関連：幹旋はありません。立川駅近辺では次のホテルがありますが、協定等はありませんので、各自でお申し込みください。
○ パレスホテル立川 042-527-1111
○ ワシントンホテル立川 042-548-4111
○ ザ・クレストホテル立川 042-521-1111
○ 立川グランドホテル 042-525-1121
- 5 駐車場：大学の駐車場が利用できます。大学への道路が狭く、分かりにくいと思いますので時間に余裕をみておいでください。
- 6 昼 食：8 日（土）学生食堂（1 号館地下、5 号館地下とも）を営業いたします。
9 日（日）学生食堂（5 号館地下のみ午後 2 時まで）を営業いたします。
コンビニエンス ampm（大学内）が両日午後 2 時まで営業いたします。
玉川上水駅にコンビニエンスストア（サンクス）があります。
飲み物の自動販売機は 1 号館、5 号館食堂付近にあります。
- 7 荷物預かり：1 号館 1 階（1-120）で、大きな荷物の一時預かりをします。

実 行 委 員 会

実行委員長 藤沢章彦（国立音大） 実行副委員長 神原雅之（国立音大）
実行委員 ◎酒井美恵子、内山澄孝、西原彰宏、古川 聡、宇佐美明子、
繁下和雄、遠山文吉、中館栄子、三戸 誠（以上国立音大）、
田中健次（茨城大学）、山本幸正（洗足学園音大）、
◎阪井 恵、田中延男、石井 亨（以上国立音大）、有本真紀
（立教大学）、島崎篤子（文教大学） （◎印担当チーフ）

*第 39 回全国大会の HP を立ち上げました。多くの会員のみなさまに広報いただけましたら幸いです。

<http://www3.to/conference39>

平成 20 年度院生フォーラムのお知らせ ポスターセッション発表者募集

日時：平成 20 年 11 月 9 日（日）12 時 30 分～13 時 30 分
場所：国立音楽大学 2-26 2-27

学会の全国大会 2 日目（11 月 9 日）に行われる院生フォーラムに参加しませんか？

院生フォーラムは、皆さんの日ごろの研究活動の成果を発表し合うことで、全国の院生同士のコミュニケーションをはかり、今後の研究活動に役立てていこうという企画です。具体的には、現在取り組んでいる研究や研究構想を発表する「ポスターセッション」と自由に情報交換や親睦を深めることができる「ミニ・パーティ」を開催します。

同じ音楽教育を専攻しながらも、他大学の院生の方々の研究を知る機会はないかなと思います。様々な経験とアイデアを持つもの同士が交流することは、今後の研究のモチベーションの向上につながることでしょう。また、研究の方向が定まっていなくても、このフォーラムに出席することで大いに刺激を受け、「現状打破」のきっかけに

なるかもしれません。

このフォーラムを通して「音楽教育」の様々な問題を、院生同士で共有し、一緒に考えていきたいと思っています。まだまだ未熟ではありますが、関東の院生協議会のメンバーが力を合わせて、私たち若手研究者の今後の研究の一助となるように充実した機会にしていきたいと思いますので、是非、全国の院生の皆さんのご協力をお願いします。

現在、研究発表をしていただける方を募集しています。9 月末日を締め切りとして下記のアドレスにメールで申し込んで下さい。申し込み時点において必ずしも完成研究である必要はありません。申し込み確認後、発表の形式の詳細を追って連絡いたします。なお、このフォーラムに関して質問等も受け付けています。その際、メールのタイトルには「院生フォーラム質問」と明記して下さい。皆さんの参加をぜひお待ちしております。

ポスターセッション発表申し込み要項

- * 申し込みは下記メールアドレスによる申し込みのみとする。
- * 音楽教育に関するテーマによる研究内容であることとする。個人研究の他、共同研究も受け付ける。
- * 締め切りは 9 月 30 日。
- * 申し込みはメールタイトルに「院生フォーラムポスターセッション発表希望」と明記の上、学校名・名前・研究題目・発表内容の概要をファイル形式で添付して申し込むこととする。

関東地区院生連絡協議会平成 20 年度幹事校

代表係 高田英一（横浜国立大学芸術系教育研究科音楽教育専攻修士 2 年）

千葉香織（横浜国立大学芸術系教育研究科音楽教育専攻修士 1 年）

メールアドレス：masterforum@hotmail.co.jp

2 海外トピックス

2-1 ISME 第 28 回世界大会および Commission セミナー報告

I ボローニャ世界大会の概要

愛知教育大学 村尾忠廣



1. 開催都市，日時，参会者

ボローニャでは一昨年（2006），国際音楽知覚認知学会（ICMPC 9th）が開催されたばかりである。今年（2008）は ISME（国際音楽教育学会）が同じボローニャで7月19日から25日まで開催された。昨年大会実行委員を務めた J. Tafuri が今回の ISME では大会実行委員長である。ICMPC には音楽教育研究者が毎回多数参加しており，私もまた昨年に続きボローニャの国際大会（ISME）に参加することになった。

参会者は約 2000 人余りだったようである。久々の大盛会と言えよう。それだけの人数であるからセッションは並行して 18 個所でおこなわれた。ペーパー発表，シンポジウム，ワーク

ショップ，デモンストレーション，これらがすべて同時に個別の会場で発表されたわけである。これにポスターセッションやコンサートが別個加わる。ボローニャ音楽院だけでは会場が賅えないから，発表を聞くだけでボローニャの街を右往左往しなければならない。しかし不便とはいえ，街を歩いて会場を移動することは結構楽しいことであった。

2. 開会式

ISME 大会の楽しみの一つが開会式である。これまでの大会ではカバレフスキー作曲の ISME ファンファーレ序曲に始まってさまざまな演出を凝らしてきた。ボローニャであるから，誰しもモーツァルトを意識した演出を

期待していたのではないだろうか。ところが、ファンファーレの前に延々と来賓祝辞挨拶が続くのである。その長ったらしい祝辞も多くはイタリア語でその後に英語の通訳が続く。やっと終わっていよいよカバレフスキーのファンファーレとなったのだが、これがまたひどい演奏なのである。スクールバンドだとはいえ、音は悪いし、ピッチもハーモニーも実によく外れる。考えてみれば、イタリアは音楽が学校教育に導入されてまだ日が浅いのである。1年365日を練習にあて、吹奏楽コンクールで優勝するような日本の演奏を期待すべきではないだろう。そう言いかけながら一方で、ISME開会式の音楽はやはりきちんとした演奏であってほしい、と思ってしまう。

3. 大会テーマ

大会テーマは“Music at all ages”。しばらく、多様な音楽を包含する「世界」とか「地球の音楽」というテーマが続いたから、横から縦に軸を移して「乳児から高齢者までの音楽」というテーマの発想なのだろう。悪くはないが要は何でもありなのである。

4. 研究発表、シンポジウム

18セッションが並行して毎日朝8時から夜7時まで発表されるわけであるから、個々の発表についてはとてもコメントできない。それで私の関わったことを述べるに留めよう。去年は

ISME 地域大会が全世界5地域で開催されたので、これを記念して今年は“ISME Regional Conference Symposium”を開催しようということになった。私はこのシンポジウムのAPSMER/ISME Regional Conferenceの代表としてパネルを務めたわけである。アジア、アフリカはそれぞれの地域、文化、社会が非常に異なっている。にもかかわらず、それぞれの地域が欧米との関係をつくろうとして、アジア諸国内の音楽教育文化交流は未熟のままであった。それだけに、APSMERに始まった中規模のISME地域大会には開催することの意義がある。が、ヨーロッパ地域大会とかアメリカ大陸（カナダ、アメリカ、メキシコ）といった地域大会はどうなのだろう。聴衆の質問や関心は私の方に多く向けられた。それは「アジア地域間コミュニケーション」ということの特異性があったのではないだろうか。

5. 次期 ISME 会長・理事選挙

ISME 次期会長には選挙の結果、イギリスの G. Welch が当選した。グラム (Welch) とは、1984 年の ISME ヴィクトリアセミナー以来 24 年もの付き合いであり、一緒に音痴の本 (*Onchi and Singing Development*) を出版してきた間柄でもある。私としては実に嬉しい。が、一方でアジアからの理事がゼロという異例の結果となった。アジア各国から多数の立候補

があったわけであるが、結果的に票が分散してしまったのであろう。これは非常に残念である。かつてのように、ノミネイティングコミッティが地域を配慮して候補者を決めていた時と違い、今は誰もが立候補できる。そういう選挙になった以上しかたのないことである。問題解決のために今後は地域別に選挙することを考慮すべきだろう。ただし、その場合、これからは中国票が左右する時代を覚悟しなければならない。日本は一時期アメリカに次ぐ ISME 参会者を誇り、その数が 100 名を超えることもあったが、今年など 30 余名である。時代の流れというべきだろう。

6. 上海 APSMER/ISME Regional Conference 2009, 北京 ISME World Conference 2010

次の APSMER/ISME Regional Conference は上海音楽院を会場として 2009 年 6 月上海市でおこなわれる。ボローニャでは、上海 APSMER のリーフレットも配布された。Website もできあがっている。8 月中には APSMER Office website

(http://www.ied.edu.hk/cape/apsmer_rl/) にアップロードされることだろう。上海音楽院は 1 昨年集中講義をしてきたのだが、昨年 3 月に招かれた時には校舎のほとんどが新築されていた。中国の変化の速さにはただただ驚いてしまう。

北京 ISME 世界大会は、私が 2001 年以来ずっと画策してきたことであつた。しかし、過去二度にわたり土壇場のキャンセルに泣かされてきた。それだけに今度は「三度目の正直」ということになる。APSMER 2003 香港大会で中国音楽院の Xie Jiaying に出会ったことが大きい。この時、北京中央音楽院から中央音楽院に交渉のターゲットを切り替えた。私としては、実に感慨深い。7つのコミッションセミナーもすべて中国本土で開催するというから恐れ入る。これからは ISME も中国・香港が果たす役割がいつそう大きくなるだろう。上海、北京の大会には久々日本から大挙して参加したいものである。

II ISME Seminar (Music Policy: Cultural, Educational, Mass Media) に参加して

日本女子大学大学院 (博士課程院生) 味府美香

ボローニャの雲ひとつない青空のもと、2 週間にわたる私の初めての

ISME が始まりました。

私は今回、ISME の本大会とその直

前に開催されるコミッションセミナーに参加しました。ISME には全7つのコミッションがあり、それぞれイタリア各地、あるいは、イタリア近郊の国で開催されていましたが、私はボローニャで開催された“Music Policy: Cultural, Educational, Mass Media”に行ってきました。このコミッションはずいぶん長い名前ですが、要するに社会学的な視点から音楽教育を研究している会です。今年の6月にはコミッションから *Music Education Policy and implementation: International Perspective*. Chi Leung, 今田匡彦他編) が出版されています(弘前大学出版会)。意欲的に活動しているコミッションだと言えます。

今回のセミナーでは、「創造的な音楽活動」、「伝統音楽」、「カリキュラム」、「マスメディアと音楽教育」といったテーマがそれぞれ社会学的な文脈との関わりの中でとりあげられていました。いずれも非常に興味深い内容で、世界各国から集まった研究者によって次々に発表されたのです。初参加の私は、オブザーバーとして申し込んでいました。しかし、参加者が25人という小さなコミュニティです。そのため、セミナー初日、オブザーバーの私にも15分の持ち時間が与えられることになりました。セミナーには私を含め、修士、あるいは博士課程の学生が6人参加しており、その全員が自分の

研究について話すことになったのです。そうそうたる参加者の前での発表は帰国したくなるほど大変でした。しかし、それ以上に、各国を代表するような研究者たちが学生一人ひとりにコメント、質問、何よりのあたたかい拍手をしてくれたのです。どれほど勇気づけられたことかわかりません。

セミナーで得たことは、(度胸も含め)たくさんありました。これを胸にいよいよ ISME 本大会への出席です。そこには名前を聞いたり、見たりしたことのある著名な研究者を含め、すさまじい数の音楽教育研究者が世界中から集まっていました。驚いたのは参加者の数だけでなく、その内容、プログラムです。口頭発表やワークショップ、シンポジウム、ポスター発表、デモンストレーションとワクワクするプログラムの1週間が待っていました。日本の諸先生方の活躍も素晴らしく、自分が日本人として大会に参加出来ることの心強さ、そして、まだまだ足元にも及ばないけれども私も何かやらなければならないという責任を強く感じました。

今、振り返って思うことは、この2週間がボローニャの焼けるような夏の暑さに負けることのない熱い熱い日々だったということです。ここで出会ったたくさんの人、そして、たくさんの学びを自分への何よりのお土産に、これからの毎日を充実させていきたいと思います。

III Research commission seminar 2008 からの報告

宮城教育大学 水戸博道



第 22 回リサーチ・セミナーは、ワインの産地として有名なポルトガルのポルトで行われた。リサーチ・セミナーは、参加者全員にプロシーディングスが事前に配られ、参加者が発表論文を事前に理解していることを前提に行われる。したがって、セミナーでの発表は論文の補足を 15 分間行うだけで、持ち時間の大半はフォーマル (25 分) とインフォーマル (60 分) のディスカッションに使われる。こうした、独特なセミナーの形態は、研究者どうしの遠慮の無い討議が目的であったはずであるが、ここ数回のリサーチ・セミナーは、表面的な美辞麗句が飛び交い、昔のようなエキサイティングな討議がなくなってきたのが残念である。しかし、アメリカの H. Price, C. Madsen, イギリスの G.

Welch, S. Hallam など、ビッグネームが勢ぞろいするセミナーだけに、発表の質は高く、今回もわくわくするような研究がいくつか見られた。たとえば、カナダからの新人 L. Wanzel は、3 年間にわたりキューバの音楽教師の生活をエスノグラフィカルな手法で調べ、そこから教員としてのアイデンティティの問題を検討した。また、日本からただ 1 人の発表であった小川容子は、アジア版音楽能力 (適性) テストの制作にむけた第 1 段階を提示し、参加者から evoking (喚起的) な研究であるとの評価が多かった。研究の評価が、完結した研究成果に対するものと、今後の研究を刺激するものの両方に与えられるものとしたら、小川の研究は後者のものとして高い評価を得たと言えるだろう。

IV 世界の音楽教育を「護る ISME」から 「牽引し支援する ISME」へ

ISME 2004-5, 2006-7 年度理事 奥 忍



ボローニャの中華飯店にて。前列左が筆者。居合わせた日本人参会者が退任の慰労会をしてくださいました。

去る7月24日、イタリア・ボローニャにおける第28回世界大会の期間中に開かれた総会で次期会長と理事が決定した。私が2期4年間の任務を終えた安堵感に満たされた瞬間であった。

ISMEの執行部は選挙で選ばれた前会長と現会長、次期会長の3名の会長グループと12名の理事からなる。理事の中の2名は3名の会長とともに常任理事会を結成し、運営と執行、財務について企画し理事会に提案する、いわば中核である。このポストを私の語学力でとにかく終えることができたのは事務局長のJudy Thönellを初め、多くの構成員に支えられたからこそである。

ところで、この4年間にISMEの方針には大きな変化があった。2004年当時は、オランダの学会センター破産のダメージからようやく脱した時にあたり、経費の状態をいかに安定させ、発展させていくかが大きな課題であった。香港教育大学のゲストハウスで自

炊しながら進めた合宿方式の常任理事会の議題の中で、最も時間が割かれたのは私の不得意分野である経済運営である。聞き慣れない経済専門用語が飛び交う中を、発言者の口元と目元を必死で見つめながら内容を理解しようと努力したものである。

それらの議論の中で私はISMEにおける日本の役割の大きさ、ヤマハの支援、とりわけ『ISME50年の歴史』発刊に対する貢献の重さを実感した。そのような中でこれまでISMEを司ってきた会長、財務担当理事、事務局長などから「ISME 名誉会長に高萩保治氏を」という推挙の声が寄せられ、全員一致でその任をお願いすることになったのだった。

しかし、その後アメリカのNAMMから支援申出があり、ISMEの運営方針が大きく転換することになる。翌年以降、常任理事会の日程はNAMM Showに合わせて、アメリカ・アナハイムのグランド・ディズニーランド・ホテル・カリフォルニアの1室を借り切って開かれるようになった。NAMMは音楽産業を結合し、牽引し、強化するとともに音楽への生き生きした参加を促す使命を標榜する全米音楽産業の協同体である。ホテルのキングサイズの大きなベッドやゴージャスな個室とともに、会議室の入口にかかっていた「ISME 常任理事会＝戦略会議」という看板を忘れることができない。

このときの会議では、毎朝8時からの朝食会にNAMMから会長、事務局長などが臨席、ISME運営の戦略化に

について NAMM が何をどこまでどのように支援できるかが滔々と述べられた。常任理事会の議論はそれまでの財政の「やりくり」から「専門的な運営」へと転換した。それは、世界各国の音楽教員集団のボランティア精神に基づく共同作業から、専門的知識と手腕を持つ専門家の起用へと ISME の運営が大きく切り替る、まさに「その時 ISME が動いた」瞬間だったのである。

戦略の柱の一つにホームページの改善が挙げられ、新しくデザイナーや管理者が起用された。現在のホームページはその成果であるが、会員・非会員がより気持ちよく使うためにはさらに改善していく必要があるだろう。翻訳頁の充実も一つの課題である。ちなみに、ISME はユネスコ傘下にあるので言語についてはその方針に則り、アジアの言語として中国語を採用することになった。私は日本語の翻訳作業を分担しているものの、ただそれだけのことである。

他の同種の団体との連携強化もまた、重要な戦略の柱である。主対象として地域の音楽教育団体との連携が挙げられた。アフリカ、南米、ヨーロッパ等、地域の音楽教育会議が ISME 地域会議として位置づけられた。村尾忠廣氏が会長を務められている APSMER（アジア・太平洋音楽教育研究シンポジウム）も例外ではない。また、他の芸術分野の同種の団体との連携強化も図られた。音楽・美術・舞踊・演劇の協議会結成の動向はユネスコ主導であるものの、ISME の果たした役割も大きい。ちなみに舞踊と演劇の団体の批准はこれからのようである。

さらに、音楽教育の活性化を図るために表彰制度が導入された。財源には NAMM とギター会社の Gibson が大きく貢献している。表彰方針、選出方

法、金額等について私は問題を色々感じてきたが、それを覆すだけの力を出せなかったことが悔やまれる。なお、これらの団体・企業からの資金と他の寄付金の総額は現在、個人会員と団体会員の年会費の総額をはるかに上回っている。

もう一つ悔やまれることは、2008-9 年度の理事選挙に日本から立った 2 名を含めてアジアからの立候補者が全員不調に終わったことである。ISME が国際的な組織ならば、地理的（＝文化的）バランスは最重要事項である。これまでの選挙では選挙人に対してこの点が強調され、幸いなことに予定調和的に進んできた。しかし、上述したように ISME の運営は変わりつつある。今日的情況下の国際組織における選挙という視点から選挙制度が改善されることを強く望んでいる。

ISME の運営に加わってうれしいことの一つに、アジアにおいて ISME が拡大しつつあることが挙げられる。今回のボローニャ大会で初めてアフガニスタンやオマーンからの参加があった。これらの国は 4 年前に私が常任理事になってアジア諸国の拡大を図るために手紙を出したときには何の反応もなかった国々である。音楽教育の普及と充実・発展のために ISME の果たす役割は大きい。私自身についても 1963 年に東京で開催された ISME に学生として参加したことが、現在の問題意識の芽になっている。

これらの国々を含めて、音楽教育を牽引し支援するためには経済基盤が堅固である必要がある。しかし、それが経済界の論理ではなく、これまでそうであったように、音楽教育関係者の善意の結晶としての基盤であり続けてほしいと強く願っている。

2-2 第 39 回韓国音楽教育学会学術大会（夏期学術セミナー）報告

国際交流委員長 藤井浩基



特別講演を行なう吉田孝会長（8月15日）

8月14日、15日、韓国の忠清北道・清州にある国立韓国教員大学校を会場に、第39回韓国音楽教育学会学術大会（夏期学術セミナー）が開催されました。日本音楽教育学会と韓国音楽教育学会は、2003年に姉妹学会交流協定を締結し、交流を重ねています。今回は、吉田孝会長が招聘され、「最近の日本の音楽教育の動向」と題した特別講演が行なわれました。会長に同行し、北山副会長、八木、田中、津田各常任理事、そして国際交流委員会より藤井が参加しました。

韓国全土から250名を超える参加

者があり、学内にホールや宿泊施設が完備された素晴らしい環境で、60に及ぶ研究発表、ワークショップ、ポスターセッション、演奏会が行なわれました。1泊2日の合宿のように寝食をともにし、音楽教育について熱心に語り合う参加者の姿が印象的でした。内容的には、韓国の伝統音楽の学習や指導に関する多くの試論が目をひきました。これは、カリキュラムでも自国の伝統音楽を特に重視する、韓国ならではの特徴と思われました。

吉田会長の講演は、学習指導要領改訂のポイントを中心に、日本の最新動

向をわかりやすくまとめたものでした
(通訳はソウル大学校東洋音楽研究所
の李知宣^{イ・ジ・ソン}さん)。韓国の参加者は、音楽
科はもとより、学習指導要領全体や解
説書作成の過程などにも関心が高く、
講演後には熱のこもった質疑応答が交
わされました。

スケジュールの合間には、今後の交
流について協議を行ないました。韓国
音楽教育学会も、今年4月に韓国教員
大学校^{ミンギョングン}の閔庚勲教授が会長に就任し、
新体制が発足したばかりです。互いに
新体制による顔合わせは、交流の発展

的継続を確認する有意義な機会でし
た。年度当初から国際交流委員会では、
会長の諮問を受け、交流の方針を検討
してきましたが、早速、学会誌の定期
的な交換など、具体的な打ち合わせが
できました。そして、来年度、広島で
の第40回大会には、閔庚勲会長にぜ
ひお越しいただきたいと考えていま
す。来年は韓国音楽教育学会の大会も
40回を迎えるそうです。互いに佳節を
祝い、新たな時代を切り拓いていける
よう、連携を密にしていきたいと思
います。

ヘルマン・ゴチェフスキ氏(東京大学大学院総合文化研究科准教授)より、
以下の情報が寄せられましたので、お知らせします。

国際的な音楽雑誌が東アジアに登場！

雑誌名：musica humana

使用言語：英語

出版元(主編集者)：

Korean Institute for Musicology, Chief Editor KIM Youn, University of Hongkong

主な内容：人間の活動としての音楽、特に形式的な音楽分析を超える学際的
な研究。詳しくは musica humana のホームページでの Call for Papers を参照。

問い合わせ先：

日本語の問い合わせは H. ゴチェフスキ (gottschewski@fusehime.c.u-tokyo.ac.jp)
へ、それ以外は英語で直接韓国のエディターへ。

musicahumana@hanmail.net, musicahumanajournal@gmail.com

投稿は常時受け付けています。

入手方法：創刊号は2009年に出る予定なので、現在はまだ入手できません。

詳しくは musica humana のホームページ

http://musicologykorea.org/02_msc_hum.htm を参照して下さい。

3. 新刊紹介

3-1

Chi Cheung LEUNG, Lai Chi Rita YIP, 今田匡彦 編著
**Music Education Policy and Implementation:
International Perspectives**

弘前大学出版会

全 261 ページ, 英語, 2000 円+税

2008 年 6 月刊行

ISBN: 978-4-902774-39-9



本書は、2006 年香港で開催された ISME, Commission on Music in Cultural, Educational and Mass Media Policies にて発表されたペーパーを基盤として、それらをさらに拡張、洗練させる形で再構成された論文集である。中国本土、香港、台湾、南アフリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ、アメリカ、そして日本で活動する学者、ポリシー・メーカー、行政官が、音楽教育の政策立案、及び、その実行について詳細な分析、検証を加える。

第1部 <From Policy and Practice> での 6 つの章では、政策、比較文化、メディアとカリキュラムをキーワードに、オーストラリア、南アフリカ、カナダ、日本、香港、アメリカの論客がことばを尽くす。8 つの章から構成される第2部では、<Creativity and

Assessment> をテーマに、変容する文化の中での創造性、情報コミュニケーション・テクノロジー、サウンドスケープ、ポストコロニアリズム及び身体性などについて論じられる。第3部 <Traditional and Contemporary Music> では、伝統音楽、民俗音楽、ポピュラー音楽、西洋クラシック音楽の音楽教育現場への導入についての実践研究 6 本が紹介されている。ロンドンの Lucy Green による第 22 章 “Meaning, Autonomy, and Authenticity in the Music” は、音楽教育研究の醍醐味である学際性を生かした、ピクチャー・パーフェクトな論文となっている。

音楽教育に限らず、学会組織そのものの規模が大きくなればなるほど、大会での研究発表はショーケース化する。

ISME の各コミッションは、それらの問題を解消すべく、テーマに応じた少数の研究発表を基盤とするため、例えばこの Mass Media Policy Commission も、西と東、北と南とを串刺しにする求心力を持つ。世界各国の研究者が一堂に会し、個々の研究について時間をかけた議論を経て出版された本書は、

故に、単なるオムニバスの枠を超えた有機的な研究成果を提示している。

詳細は以下のサイトにて：

<http://www.hirosaki-u.ac.jp/hupress/shoseki/048.html>

(今田匡彦：弘前大学)

3-2

リズム＆ゲームにどっぷり！リトミック77選

編著者：神原雅之 出版社：明治図書 発行年：2006年 B5版 全164頁

アクション＆ビートでつくる音楽鑑賞の授業

編著者：神原雅之 出版社：明治図書 発行年：2007年 B5版 全128頁

世界の歌を遊ぶりトミック・ゲーム67選

ーボディー・パーカッションから音楽表現までー

編著者：神原雅之 出版社：明治図書 発行年：2008年 B5版 全144頁



上記の3つの著作は、子どもが夢中になる楽しい音楽活動の珠玉集です。筆者がこれまで幼児や児童とのかかわりの中で実践してきたリズム・ゲーム

を中心に、活動のねらいと展開方法について整理したものです。

幼児・児童は、言語的にも運動的にも、そして音楽的にも大きな成長と発

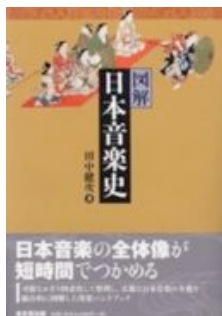
達の最中にあります。一人ひとり個人差も能力差もあります。このような時には、子どもが既に備えているスキルを手がかりとしながら、即興的な音楽遊びとして「音楽のうねり」と「コミュニケーション」を楽しむことが、個を生かした音楽活動の鍵になる、と筆者は考えています。また、指導者は、動きや言葉に含まれている音楽的体験を誘い出し、共に活動する存在として子どもとかかわることもポイントです。

言葉や運動を伴う活動には、音楽的センスを駆使しながら参加できるチャンスが多く含まれています。特に『音

楽鑑賞の授業』は児童を対象としてまとめたものですが、幼児も実践可能です。既存の名曲を聴きながら、運動的・言語的な活動を伴いながら音楽鑑賞活動を行うアイデアを紹介しています。kinesthetic (筋感覚) 的な体験を基に、対話し、音楽に含まれている様々な意味（音楽を特徴付けている要素など）に自らが気づく機会としたいのです。機会があれば、是非お試し頂き、楽しい音楽活動に役立てて頂ければと願っています。

(神原雅之：国立音楽大学)

3-3



図解日本音楽史

田中健次著

東京堂出版，全 318 ページ，日本語，2,600 円＋税

2008 年 8 月 1 日刊行

ISBN: 978-4-490-20632-6

本書は、「初心者でも短時間で日本音楽の概要が把握できる書」を目的として出版された『ひと目でわかる日本音楽入門』（音楽之友社，2003 年，以下「前書」）の増補改訂版として位置づけることが出来る。前書は、日本音楽の先行研究をネットサーフならぬ「ブッ

クサーフ」して、そこから得た知見を「最大公約数」「最小公倍数」という視点から整理し、見開き一項目、片側図版、片側説明文というページスタイルをとった。本書においても同様のページスタイルを採用している。

ただし本書では、先行研究を参考に

するだけではなく、①極力、筆者がそれぞれの演奏の場を見聞きし、その実体験感を包含したこと、②また前書をまったく参考にしないで一から書き出したので、前書と内容的な重複はないこと、③そして前書が「音楽の教師」を意識してまとめたが、本書は、さらに「広い読者」を対象としているため、④前書では扱っていない「民謡」や「詩吟」などの項目も入れるとともに、⑤たとえば「師匠といえは親も同然一流派と家元」「流行語大賞があつたならー日常語になった雅楽の言葉」「免許皆伝までざっと三十年ー声明の唱法」「空気を切り裂く掛声ー能の音楽構造」「身の毛もよだつ、怖〜い物語ー説経節」「江戸情緒の美意識ー端唄・うた沢・小唄」などと、すべての項目の見出しにタッチコピー風の表現を用いた。

なお本書を手にとつていただけることがあつたならば、「あとがき」を是非読んでいただきたい。そこに本書を出した意図を吐露している。以下は東京堂出版編集部による本書の解説文である。「日本のさまざまな伝統音楽の歴史と概要を初心者でも短時間で俯瞰できるー邦楽の理解に必要な事項を見開き2ページ「解説」と「図表」で整理した入門書」

【目次】日本音楽のあらまし、雅楽、声明、能楽、琵琶楽・詩吟、尺八楽、箏曲、三味線楽その1ー発生と地歌、三味線楽その2ー浄瑠璃、三味線楽その3ー歌舞伎、三味線楽その4ー近代の三味線楽・歌曲、民謡、楽器

(田中健次：茨城大学)

4 事務局より

4-1 お知らせ

(1) 第39回大会参加お申し込み方法は、同封の「第39回大会参加申し込みについて」をご覧ください。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

(2) 年会費未納の方には、「払込取扱票」を同封しますので、早めの振り込みをお願いします。

(3) 住所変更された方は、学会事務局にFAXまたはEメールでお知らせください。

4-2 前事務局スタッフより

♪中村幸子♪

6月末まで事務局スタッフとして働いていた中村幸子です。ふりかえると、平成17年10月、週に1度のお手伝いという軽い気持ちでスタートして間もなく、大ベテランの前スタッフが辞めてしまい、右往左往しながら仕事をしていたことが思い出されます。わからないことばかりでしたが、少しでも会員の皆様のお役に立ちたいという思いで頑張ってきました。事務局長のあたかなご指導のもと、新しく加わった

スタッフたちと支え合ったことは、今では得がたい経験です。また、理事会や編集委員会に出席させていただき、学会を支える先生方の音楽と教育への情熱に触れ、大変感激したのも貴重な思い出です。

今春、事務局はスタッフも、事務所も移転して、新しく生まれ変わりました。新しい船出に心からお祝い申し上げますとともに、音楽教育学会の末永い発展をお祈り申し上げます。事務局からは離れますが、音楽と教育のあるところに、心は共にあるつもりです。

……【編集後記】……

国内では第4回夏期ワークショップの報告、海外ではISME第28回世界大会、第39回韓国音楽教育学会学術大会の報告を掲載いたしました。さらに3つの新刊書籍の紹介も掲載することができました。執筆者の皆様のご尽力に深く感謝いたします。

しかしながら、国内外の音楽教育に関する情報交換の場としては、必ずしも十分とは言えないことを自覚しています。幅広い会員にとって意義ある情報を提供できるよう、様々な音楽教育関係のイベントをはじめ、他の分野の学会の情報についても積極的に掲載していくなど、紙面の充実のために知恵を絞っていきたいと考えております。皆様方からの積極的な情報提供とともに、ニュースレターのあり方について忌憚のないご意見を事務局までお寄せいただけましたら幸甚です。

記事でも紹介しておりますが、第39回全国大会（国立音楽大学）の実行委員会が大会用にすばらしいHPを立ち上げておりますので、ぜひご覧下さい。会員の皆様の力で国立大会を盛り上げていきたいものです。

（北山敦康，津田正之）

<平成 20～21 年度 日本音楽教育学会役員>

会 長：吉田 孝

副 会 長：北山敦康

常任理事：齊藤忠彦（事務局長），嶋田由美・津田正之（総務），田中健次（会計）
小川昌文・杉江淑子・三村真弓（企画），八木正一（編集）

理 事：尾藤弥生（北海道），降矢美彌子（東北），佐野 靖・筒石賢昭
坪能由紀子・藤沢章彦・本多佐保美（関東），村尾忠廣（東海）
安田 寛（近畿），吉富功修（中国・四国），岩崎洋一（九州）

会計監事：奥 忍・今川恭子

事 務 局：亀山さやか・山本由紀子・光平有希

<日本音楽教育学会事務局>

【事務局本部】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

日本音楽教育学会事務局

TEL&FAX 042-381-3562

E-mail onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-0015 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

開局日：火・水・木・金 10:00～16:00

【事務局編集担当】

所在地：〒739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1

広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座

権藤研究室気付 日本音楽教育学会事務局〔編集担当〕

E-mail jmesedit@hiroshima-u.ac.jp